



## 「小さな手」の思い出 ～年末年始休業にあたり～

早いもので、今日で2学期も終了しました。子どもたち一人一人の成長、学級としての成長、そして学校としても大きな成長を感じることできた2学期でした。様々な経験を通し、共に喜び、はげまし、怒り、許し、折り合いをつけながら、「集団生活」だからこそ経験できる学びの多い日々をおくれたのではないかと思います。明日からは「家族での時間」をたっぷり味わえる期間となります。そこで、私が子どもの頃に経験した、忘れられない「家族との思い出」を「教育」とつなげながら書こうと思います。

私には、年齢が一回り離れた妹が二人います。6年生の夏、「双子の妹」が産まれました。初めての妹が同時に二人できたことに、なんとも説明しがたいドキドキする感情が芽生えたのを思い出します。

持久走大会の日、「お兄ちゃん、妹のためにマラソンも頑張れよ」と、担任の先生から意味不明な励ましを受け、私も単純だったので「いっちょ頑張ってみるか」と走ったところ、突然1位になり、自分でもびっくりしました。多分、周りより一足早く成長期がきて、スポ少のバスケットで走り込みをしていたおかげだと思うのですが、絶妙のタイミングで1位になったので、「兄ちゃんになると違うな」と、ここでもまた意味不明な賞賛を受け、自分でも「俺は強い兄ちゃんになった」と妙な誇りが生まれたのを覚えています。

私が高校生になった時、妹は保育園児でした。高校で応援団をしていた私は、保育園の迎えの時間になると「時間なので帰る」と告げ、応援団の格好のまま保育園に迎えに行きました。やんちゃな園児たちとひと遊びした後、両手に「小さな手」をつないで帰る道は、何とも幸せな時間でした。そんなこんなで、とにかく妹を可愛いがりました。学校の先生になろうと思ったのも、妹たちのおかげかもしれません。

年末のある夜、母と妹たちは「おやすみ」を言って寝室に行き、賑やかだった家の中が静かになりました。私はふと、寝ている妹たちをなでてあげようと思い、寝室に行きました。真っ暗な部屋にそっと入り、寝ている妹の手を探すと、「小さな手」がありました。私は、その「小さな手」をそっと握り、なでてあげました。心の底から愛情を感じ、大事に大事に思いながら可愛い妹の手をしばらくなでていたら、突然、「ガク、何してんな？」と、暗闇から母の声。私が妹の手だと思って暗闇の中でずっとなでていた「小さな手」は、母の手だったのです。私は悲鳴をあげて、「間違っただけ」と叫びながら寝室を飛び出しました。後ろから、母と二人の妹が追いかけてきて、「びっくりしたのはこっちだ。暗闇で突然高校生の息子から手をなでられたら、お母さんの方がびっくりすんぞ」とか「お兄ちゃん、私の手だと思ってお母さんの手をなでた～」とか、みんな大笑いしながら口々に私に冷やかしの言葉をあびせてきました。年末の夜、突然の大騒ぎになりました。保育園児の手の大きさと、母の手の大きさが同じなわけはありませんが、人間の思い込みというのは、恐ろしいものです。あの夜の衝撃は、今でも忘れられません。

あの頃は、ただの「笑い話」としか思っていなかったのですが、今になって振り返ると、少し違った意味での思い出になっています。私は、妹たちのおかげで「愛される子」から「愛することのできる人」に成長することができたのだと思います。「子育てをしながら親も成長する」のと、同じですね。

家族でゆっくりと過ごせる年末年始休業。どのご家庭でも、家族の宝物のような時間がおくれますことを願っています。

(文責 校長)